

晩年の呉秀三先生と私

緒方 富雄

私たちが東大医学部に入学しましたのが大正十一年四月（一九二二）で、卒業しましたのが大正十五年三月（一九二六）でした。ところで、呉秀三先生は大正十四年三月（一九二五）に定年退職なさいましたから、私たちが四年生のときの一年間は、呉先生のあとに教授になられた三宅鉦一先生に教わったわけです。ですから、われわれが呉先生の精神科を教えていただいたのは三年生までであったことになります。

当時の呉先生は、われわれ二十歳代前半の若者には、すっかり御老体で、書きものを読まれるときも、字を書かれるときも、小さな眼鏡をはずされ、顔を紙面にすりつけるようにされるので、いっそう御老体という気がしました。

私は呉先生の精神学の講義そのものに出た記憶はありません。第一、そういう講義があったのかどうかもおぼえておりません。出たのかも知れませんが、なにもおぼえておりません。私がなまけたのかもしれない。先生の「ひとりごと」のような低い声での講義は、どうもただけませんでした。

私がおぼえておぼえていますのは、先生の外来実習、すなわち外来の患者をまず何名かの学生が予診し、そのあとで患者をつれて先生の前でいろいろ教えていただく実習ですが、それには出たおぼえがありません。特に今でもよくおぼえている場面があります。

患者は、憂鬱で、機嫌のわるい男でした。学生の誰がこの患者を受持ったのか知りませんが、患者が呉先生の前になら

つて、先生の間診に答えていました。その時先生は、突然患者にこういわれました。

「君は東京に水のない川があるのを知っているかね？」

患者は無表情に

「知りません。」

と答えました。学生たちも、そんな川あるのかなと、不審そうな表情をしています。すると先生は患者に、

「小石川じゃないか。」

といわれました。それをきいて、学生たちは、思わずドッと笑いました。すると、先生は、われわれに

「君たちは笑ったが、それが当り前。この患者は笑わなかった。そこが病気のだよ。」

といわれました。私は「なるほど」と感心しました。いわゆるユーモアも精神のはたらき具合の判定に役立つものだなあと、妙なことに感心したものでした。実は、そのころの先生に、こういうユーモアのセンスがおありとは知りませんでした。

もう一つ。これは呉先生の時であったか、そのあとの三宅先生の時であったかハッキリしませんが、私には、精神病学のありかたの一端を教えられたという点で、ここに語ることをお許しください。

それは外来実習のときでなく、臨床講義として、患者を供覧しておられたときのことでした。患者は、当時の松沢病院に収容されている中年の男でした。日本酒の新しい製法を發明したというので、実地に作らせてみたら、できたというが酒ではなかったということ、詐欺として訴えられ、精神鑑定の結果、精神病ということになって松沢病院に収容されていた患者でした。当時の病理学教室の二階の講堂につれてこられた患者は、椅子に腰かけさせられて、先生が、

「君の新しい日本酒の製法の發明の動機と製法の大体を学生さんに話したまえ。」
とうながされるままに、患者は語りはじめました。

「そもそも、今の酒は、本当の酒ではありませんので……」

患者の方法というのは、まずバケツに水を入れ、それにムギワラを突込んでおく。そうすると、だんだん酒ができてくる。というようなことでした。もうすこし複雑だったのかもしれない。われわれは患者の話に啞然としていました。先生はまず患者を退席させてから、学生に、どこがおかしいと思うかねとたずねられました。みんながだまっていますと、先生は、

「今の酒は酒じゃないと、頭から否定してかかっているところが狂っているね。」
といわれたので、学生は「ナァーンダ」と自嘲気味にわらったことでした。

まえの、水のない川のことといい、この酒のことといい、私たちは患者をめぐって、先生にすっかりはぐらかされたかたちでした。しかし、よくしたもので、それでも私はいつの間にか被害妄想や躁鬱病や、その他のいろいろな精神病の实例を目のまえにして、精神異常を体験的に理解できるようになりました。

私が呉先生から学んだのは、精神科だけではありませんでした。

先生は名だたる医史学者でした。その代表的な著書に、『箕作阮甫』『華岡青洲先生及其外科』『シーボルト先生其生涯及功業』があります。また『箕作麟祥伝』があります。先生のこの方面の著作の大きな特徴は、極度に緻密であることで、すべて資料にもとづいて実証的、考証的に述べていられます。先生はいつも著作の序文のあとに、その著作について世話になられた方々の名前をことごとく、もれなく掲げて謝意を表していられることです。時には何十名に達しています。先生はその都度、名前を記帳しておかれたにちがいありません。私のように大ざっぱな人間は、お世話になった方々の姓名を、さて列挙するとなれば、きつと何人かを脱落しそうで、かえって失礼なことになるのを恐れ、先生の真似はできないままになっています。

私は東大の学生になって早々から、曾祖父緒方洪庵（一八一〇—一八六三）に関心を持ちはじめ、家にある資料などを調

べはじめました。それに関連して、大学三年生の春、多分、父銈次郎の呉先生あての紹介状を持って、医学生とは別の身分でお目にかかり、先生のおすすめで、菊池大麓先生のたつ未亡人への紹介状をいただいて、小石川竹早町のお宅へうかがいました。洪庵がかつての適塾門下生であった箕作秋坪（もと菊地氏）にあてた七十通にあまるてがみをお持ちであったので、それを拝借させていただくためでした。

呉家と菊池家とは箕作阮甫（一七九九—一八六三）の子女との婚姻によって、親戚になっておられ、一方私の祖母、吉重が佐藤泰然の娘きはが嫁した三澤良益（一八一七—一八六六）との間の二女で、十四歳で祖父、緒方惟準に嫁しており、吉重の叔母に当る（すなわちわの妹）もとが箕作麟祥に嫁いでいますので、そちらから、箕作家も佐藤泰然の一家と縁がなっておりますから、私の祖母が、よく「大麓さん」「おたつさん」（菊地氏）「麟祥さん」「おもとさん」などの名をきいたものでした。こうひろげてまいりますと、緒方家も佐藤家と縁がなっているわけです。

このようなわけで、私が菊池未亡人にお目にかかりましたとき、私の祖母吉重のうわさも出ました。

菊池様は洪庵の秋坪あての七十通にあまるてがみをころよく貸していただいたうえ、箕作阮甫のてがみも、何通か拝借しました。

この時、私は二階の広い座敷に案内され、そこに阮甫先生の蔵書がたくさん、いくつも積み重ねてあるのを拝見しました。これは呉先生が『箕作阮甫』を書かれたときの資料だそうです。私はここであらためて、呉先生の文献調査の現場を拝見した感じをあじわいました。

x x x

私が大学を卒業したのが大正十五年三月（一九二六）で、将来血清学を専攻するつもりで、その前段階として病理学を修得するため、まず病理学教室に入りました。

その翌年昭和二年十二月（一九二七）日本医史学会が創立されました。そのまえに、私に理事になれというお話があり

ました。大学を出たばかりの若造が理事とはおそれいりましたが、そういうことになってしまいました。事務所は内幸町の東拓ビルのかなかにあって、実際に中心になっておられたのは、富士川游先生でした。多分富士川先生のお考えで、初代の会長に呉秀三先生がなられました。医史学会の例会は、毎月第三水曜日の夜に中山研究所の談話室で開かれました。それに先だって、地下の食堂で、有志十人ばかりの会食がありました。呉会長をはじめ、富士川游先生、入澤達吉先生、藤浪一先生、山崎佐先生、私などが常連で、毎回なんかももしろい話題で、愉快なひとときをすごしたものでした。

呉先生はいつも多くを話されませんでした、いかにも気持よさそうに、話にとけこんでおられました。当時の老大家のお話にまじって、私になにかことばを発したかどうか、全く覚えていません。

食事の終りにコーヒーが出ますと、呉先生はきまってチョコッキのポケットから、小さいビンのなかの白い丸薬を二粒手のひらに出され、それをコーヒーのなかへ落とし、しばらくかきまぜてから飲まれました。先生に糖尿の気があったのでしよう。妙にそれを覚えています。

食後四階の談話室の会場にাগり、それから例会がひらかれるのですが、その司会をいつも呉先生がつとめられたかどうか覚えていません。先生の司会は、決して会衆をひきたてるといふような性格のものではありませんでした。

どうも私には、晩年の呉先生はその文筆のなかで、別人のように生々としておられたように思われてなりません。